

**特集年⑤
戦後80年**

やせた人は帰国を許されず
戦争はもうこれで終わりに

8月16日貨車で興南に移った。兵隊は移動するたびに多数の死者が出た。朝、目が覚めると右の弱兵も左の弱兵も死んでいた。そんなことがたび重なり人の死に対しでは不感症になっていた。たまりかねた軍医が皆を集めて「今の大學生ではこの病気に必ず効くという薬は二つか三つしかない。お前た

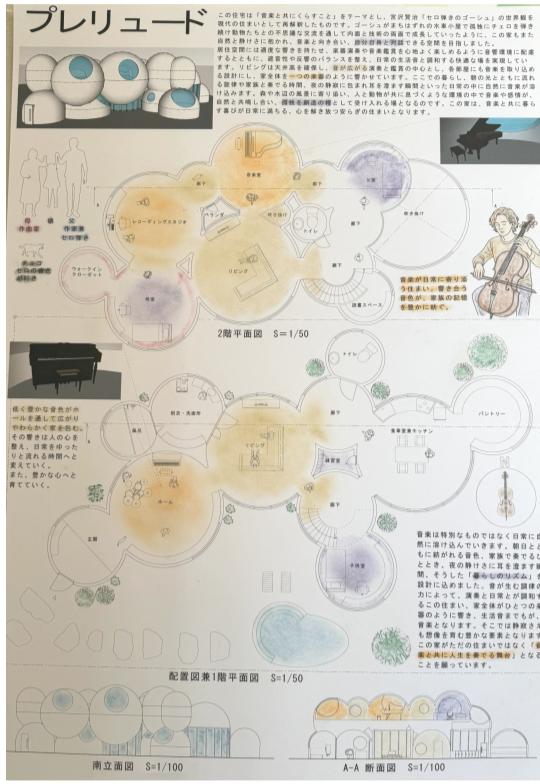
山本君は「全国規模の建築設計コンペティションで、自分の力を試したい」と思い応募した。建築作品図面は約3か月かけて完成させた。タイトルは『プレリュード』で音楽の始まりという意味だが、1日の始まり、人生の始まりという思いを込めた。音や光、人の気配が調和するような空間を形にするのは難しかった。審査員がその意図を感じ取ってくれてうれしかった。入賞できることは黒川朋寛先生と笠木元太先生のアドバイスのおかげ。先生方の支えが

第39回日本工業大学建築設計競技 山本君が奨励賞に

音や光との気配が調和



受賞を喜ぶ山本良太君(建3)



山本君が作成した「宮沢賢治の物語の家」

建築科3年の山本良太君は第39回日本工業大学建築設計競技で奨励賞を受賞した。全国から40校が参加し、80作品の応募があった。競技は「宮沢賢治の物語の家」という課題で設計を行なった。

山本君は「全国規模の建築設計コンペティションで、自分の力を試したい」と思い応募した。建築作品図面は約3か月かけて完成させた。タイトルは『プレリュード』で音楽の始まりという意味だが、1日の始まり、人生の始まりという思いを込めた。音や光、人の気配が調和するような空間を形にするのは難しかった。審査員がその意図を感じ取ってくれてうれしかった。入賞できることは黒川朋寛先生と笠木元太先生のアドバイスのおかげ。先生方の支えが

あつたからこそ頑張れた。この経験を励みに、これからも心に響く建築設計をしていきたい」と語った。

山本君を指導した笠木先生は「今回のテーマである『宮沢賢治の物語』から建築と結びつけてイメージし構想すること」を語った。山本君は「宮沢賢治の物語」から建築と結びつけてイメージし構想すること」を語った。

山本君を指導した笠木先生は「今回のテーマである『宮沢賢治の物語』から建築と結びつけてイメージし構想すること」を語った。山本君は「宮沢賢治の物語」から建築と結びつけてイメージし構想すること」を語った。

新聞全道

貴重な体験と多くの学び 分科会で運営を担当



班で討議をする村岡君(右奥)

新聞局の7人は10月8~10日に網走市で行なわれた。第69回全道高等学校新聞研究大会に参加した。大会には全道から39校生徒235人が参加し、新聞発行の意義や制作技術を学んだ。

大会1日目は開会式の後、記念講演で網走市農林水産部水産漁港課課長の渡部貴聴さんが「オホーツク・網走あなたが知らない? 山・川・海」の深い関係」と題して講演を行なった。2日目は8分科会が発表し、各分科会の内容を

参加者で共有した。新聞の全道大会では分科会がメインとなる。今年の分科会は当番のオホーツク支部内の参加校が2校のため、8分科会の運営は困難なので各分科会を各支部で受け持つこととなつた。上川支部はIA分科会を担当することになり、小西輝君(電1)、旭川永嶺君(電1)、

小西君は「初めての全道大会で分科会の運営を担当し、まだ1年生で学ぶことがたくさんあるが、貴重な体験をすることはできて良かった。話し合いでの意見交換が多かった」と話した。

12回目の総合賞 旭工生の協力のおかげ

写真の質を向上させたり、取材を通じて多くの工夫をして、今まで以上によい新聞を作っていました。また、これからは校内での記事だけではなく地域や社会に目を向けた特集にも積極的に取り入れるなど、多くの工夫をして、今まで以上によい新聞を作っています。

これが人間の英知というもののなかろうか。

日本の島影に感動

船上で死亡した人も

しがつたが、しょせんは「宦官(かんがん)」同様の弱兵ばかりであった。演芸会で聴いた三味線の越後獅子には故郷をしのび万雷の拍手が鳴りやまなかつた。

翌22年1月待望の帰国船がきた。これに乗が、あいにくのマラリアで見送つた。シベリアに行くときハネられた。シベリアに行くときハネられた。そこでハネられたのは分かるとしても、何で帰國船は兵隊であふれた。眼に熱いものが込み上げてきた。「九死に一命が転々とした。最後に来た収容所である日、坊主頭に軍服を着た芸者が飛び込んできてうわさにならなかった。隣に寝る兵隊をうらやまなった。お前たちはお前はやせていて。こんなにや

しがつたが、しょせんは「宦官(かんがん)」同様の弱兵ばかりであった。演芸会で聴いた三味線の越後獅子には故郷をしのび万雷の拍手が鳴りやまなかつた。

翌22年1月待望の帰国船がきた。これに乗が、あいにくのマラリアで見送つた。シベリアに行くときハネられた。そこでハネられたのは分かるとしても、何で帰國船は兵隊であふれた。眼に熱いものが込み上げてきた。「九死に一命が転々とした。最後に来た収容所である日、坊主頭に軍服を着た芸者が飛び込んできてうわさにならなかった。隣に寝る兵隊をうらやまなった。お前たちはお前はやせていて。こんなにや

せるまで働かしたかと思われるとソ連の恥になる。もう少し肉をつけてから帰れ」といわれた。そうはいっても望郷の念は募るばかりになつた。3日目は全体会で各分科会で行なつたことを代表が発表し、各分科会の内容を

参加者で共有した。新聞の全道大会では分科会がメインとなる。今年の分科会は当番のオホーツク支部内の参加校が2校のため、8分科会の運営は困難なので各分科会を各支部で受け持つこととなつた。上川支部はIA分科会を担当することになり、小西輝君(電1)、旭川永嶺君(電1)、

小西君は「初めての全道大会で分科会の運営を担当し、まだ1年生で学ぶことがたくさんあるが、貴重な体験をすることはできて良かった。話し合いでの意見交換が多かった」と話した。

ペトロスクの病院にいたとき、同室の十数人で戦争について討論したことがある。「今度戦争があつた兵隊を看護婦が甲板に抱いてきた。「ごらんなさい、あれがあなたの故国です」といつて泣いた。皆泣いた。

皆の手が勢いよく上がった。「ついでにその息子や成人になった孫も送ろう」「賛成」全員の手がさらには勢いよく上がった。第一線で辛酸をなめた兵隊のいつわらざる実感であった。

戦争はもうこれで終わりにした。それが人間の英知というものなかろうか。